

音楽科カリキュラムにおける創作領域の変遷についての日英比較

松永洋介（岐阜大学）

目的

本研究の目的は、日英の音楽科カリキュラムにおける創作領域について、それぞれの指導内容の経年的な変遷を探ることである。その上で、両国の創作領域の扱い方についての共通性と相違点とを明らかにすることを目的とする。

結果

日本と英国の創作分野の授業は、音楽的要素を中核に据えた学習を展開しているという点で共通性がある。そして、両国とも音楽的要素を子どもと十分に活動を通して関わらせているという点で、音楽的経験を子どもの中に蓄積させ、それを整理して音と知識とを結びつけていこうとする方向性を見ることができる。また、両国とも現行のカリキュラムにおいては音楽的な構造を重視する傾向にあることが明らかになった。

方法

日英両国の音楽科カリキュラムの中に記された創作分野の内容をそれぞれ比較する。なお今回は小学校（英国では primary school）に限定した。

日本のカリキュラムは「小学校学習指導要領」（以降、指導要領と記す）を対象とした。第1次指導要領（昭和22年）から第8次指導要領（平成20年告示）に至るまでの8種類である（本文では以降、第〇次指導要領と略記する。また括弧内は告示された年であり、初出時のみ示す）。

英国のカリキュラムは、「National Curriculum (England)」の「Music」（以降 MNC と記す）を対象とした。MNC は1992年に初めて作成されてから、1995年、1999年の改訂を経て現在に至っている。これら3種類を対象とした。なお MNC におけるキーステージは KS と略記する。

内容

創作分野は日本の学習指導要領においては「音楽づくり」として示されている。また、英国の MNC では「作曲 (Composing)」として示されている。

(1) 日本の学習指導要領における創作領域の変遷について

第1次指導要領から第5次指導要領までは主に旋

律創作が中心であるといえる。このことは第1次から第4次（昭和43年）までの指導要領の中に示されていた「教科の目標」によって明らかである。例えば第1次では「三 音楽における創造力を養う（旋律や曲を作ること）」として示され、第2次では「簡単な旋律を作る技能」と示された。

第5次指導要領以降は教科の目標が一文で示されるようになり、目標の中には旋律創作を示す言葉は見られなくなった。創作領域の内容が示されているのは、指導内容の中である。例えば第1学年ではリズム遊びやふし遊びをする中で、「即興的にリズムや旋律を工夫して表現する」ことが示されている。また第2学年では、第1学年のリズム遊びやふし遊びが、リズム問答やふし問答に発展する。つまり、第1学年では個人の表現であったものが、第2学年からは友だちとの関わりができてくるということである。

第3学年からは低学年のリズム問答やふし問答を発展させた形で「言葉の抑揚に合わせて、即興的に短い旋律を工夫して表現する」ことに発展する。さらに第5学年では「短い旋律」が「旋律」となり、これは前時指導要領までの一部形式をふくむ「まとまった形式」を作ることを踏襲しているといえる。

以上の点から第5次指導要領においても創作領域の内容は旋律創作であると判断できる。

第6次指導要領（平成元年）では創作領域は「音楽をつくって表現できるようにする」という文言で示された。そしてこの部分は「ア 簡単なリズムや旋律をつくって表現すること」と「イ 即興的に音を探して表現すること」の2つに分けられた。このうち、アはリズム創作と旋律創作を中心としたものであり、第5次までの内容を踏襲しているといえる。これに対してイは即興表現に関わるものである。即興表現は第2次指導要領の低学年で示されたこともあったが、第3次からは示されなくなった。したがって本格的に取り上げられるようになったのは第6次からであるといえる。第7次指導要領（平成10年）も基本的に第6次を踏襲している。

さて、第8次指導要領（平成20年）では創作領域として「音楽づくり」という言葉が用いられた。指導項目は、アとイの2項目からなっている。第8次の特徴は、それまでの即興表現に音楽としてのルー

ルを持ち込むことによって、音楽的構造を重視している点が特質である。

また新たに示された〔共通事項〕が各領域間を結びつけるとともに、現場の教師に、創作領域の指導内容に基づいて授業を構想するための示唆を与えている。

以上の点から、創作領域の内容が大きく変わったのは第6次指導要領からであるといえる。また第8次指導要領からは、音楽的構造を重視した内容構成となっている。

(2) 英国のMNCにおける作曲領域の変遷について

日本の学習指導要領に示されている目標に該当するものは、MNCでは到達目標 (Attainment Target) として示されている。

第1次MNCでは、作曲領域の到達目標は2つの視点から設定されている。一つは創作活動の内容であり、もう一つは記譜やコミュニケーションに関する内容である。第2次MNCでは、KS1では創作活動の内容についてのみ示し、KS2からは第1次と同様、記譜法を加えた2本立てとなっている。第3次MNCにおいても、到達目標は創作活動の具体的な内容を示すものとなっている。

ここでは各次のKS1の到達目標の比較を試みる。なお、第3次MNCではKSごとに1つの到達目標が示されるのではなく、2つから4つのレベルが存在する。そしてその中で到達するのが望ましいとされるレベルが1つ示されるようになった。KS1の場合、該当する到達水準はレベル1からレベル3であり、望ましいレベルは2である。

以下、各次の到達水準を示す。

- 第1次 簡単な作曲をするために、音を探し、選び、つなぐ。
- 第2次 児童は音を探究し、選択し、秩序づける。単純な構造をもった曲を作曲し、強弱と音色を含めた音楽的要素のいくつかを用いて表現豊かにする。
- 第3次 あらかじめきっかけとして与えられたアイデアへ応答する形で、音を注意深く選択しながら、それらを初め、中、終わりという簡単な構造にまとめる。

到達目標を比較したところ、第1次から第3次までを通して共通するキーワードは「探究」と「音楽

的構造」である。しかし「探究」は質的には第2次から変化している。第1次では「音を探し」とあるが、ここでの活動は、例えば楽器や声がつくり出す音を探るような活動が示されている。しかし第2次からは音楽的なパターンを即興的に変化させるような活動が示されている。つまり第2次では音楽に発展するもとしての音楽的アイデアが重視されているといえる。このことは第2次の到達目標の2つめはそのことを示していると考えられる。以上のことから「探究」は、自由に音を出して音の性質を試す経験を重視することから、経験させるだけでなく、音楽として成立させるように活動することも含めるように意味が変化しているといえる。そして第2次MNCからは、音楽的構造が一層強調される傾向にあると判断される。

参考文献

- 木村信之 (1993) 『昭和戦後音楽教育史』, 音楽之友社
- 塩原麻里 (2003) 「イギリスの音楽教育における評価：ナショナル・カリキュラムを中心に」『東京学芸大学紀要第5部門 芸術・健康・スポーツ科学』第55号, pp. 25-34
- 文部省 (1947) 『学習指導要領 音楽編』, 東京書籍
- 文部省 (1951) 『小学校学習指導要領 音楽科編』
- 文部省 (1958) 『小学校学習指導要領』, 大蔵省印刷局
- 文部省 (1969) 『小学校指導書 音楽編』, 東洋館出版社
- 文部省 (1978) 『小学校指導書 音楽編』, 教育芸術社
- 文部省 (1989) 『小学校指導書 音楽編』, 教育芸術社
- 文部省 (1999) 『小学校学習指導要領解説 音楽編』, 教育芸術社
- 文部科学省 (2008) 『小学校学習指導要領解説音楽編』, 教育芸術社
- Department of Education and Science (1992), *Music in the National Curriculum (England)*, HMSO
- Department for Education (1995), *Music in the National Curriculum (England)*, HMSO
- Department for Education and Employment (1999), *Music in the National Curriculum (England)*, HMSO

ほか